

村山鋼材社長

◆自社の強みと今後の営業展開は

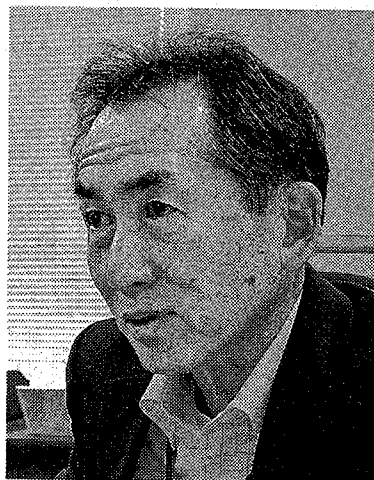
ロール状の鋼帯（コイル）の切断・加工事業を手掛ける村山鋼材（千葉県浦安市、村山和雄社長）。約60年前に業界で初めて広幅厚板の大型コイルを加工できる「レベラーライン」を導入し、加工品を石油タンクや建設機械・車両などの部材向けに出荷している。産業界で生産効率化の取り組みが広がる中、大型鋼板の活用による工期短縮効果が評価され、売り上げを着実に伸ばしている。村山社長に事業内容や課題を聞いた。

◇

——今年で創業65年を迎える。

「1952年に創業し、58年に業界で初めて広幅厚板コイルを加工できるレベラーライン（コイルを平板にならす設備）を導入した。鉄鋼メー

この人に聞く



むらやま かずお
村山 和雄氏

大型鋼板の工期短縮効果訴求

カーからロール状のコイルを切り入れ、コイルセンター（浦安工場）で平らな板に加工して出荷している。創業後、日本経済は好景気が続いたが、74年以降に不景気となり、この業界も低迷した。景気動向に左右されやすい業種だが、安定的に経営を続けられ

るよう基盤整備に努めてきた」

——生産体制は。

「東日本大震災後の2012年に、本社と生産機能を東京の大森から浦安に移した。現在は大型と中・大型の2本の製造ラインで、厚板と薄板を切断・加工する事業を展開している。厚さ3・2〜25ミ

のコイルを自社で切断して平らになり、厚さ3・2ミ以下になる。厚板と薄板を合わせ月間1万7000トを出荷する能力がある」

——自社の強みは。

「厚さ3ミ、長さ12ミ30ミの大型鋼板（厚板）を加工でき

る設備の『JCL-1』が当社の売りだ。コイルをレーザーで正確にカットし、計算された圧力を加えることで、出荷後に鉄板がよじれないようにする技術確立した」

——特に需要が大きい分野は。

「出荷品は石油・ガスなどのタンクや、建機などの部材に多く用いられる。厚板はトネルの補強材、薄板は家電やロボットの部材などにも使われる。現在、新たな用途に

展開するための販路を開拓しているところだ」

——製品をどう売り込む。

「近年、2020年東京五輪の準備や豪雨・地震の災害復旧などの現場で需要が高まっているが、それらの工事は限られた工期の中で確実に工事を完成させなくてはならな

い。例えば橋梁の床版を一つ一つ貼り合わせて作っていたら時間がかかるが、当社が加えた圧力を加えることで、加工した広幅・長尺の大型鋼板を使えば工期を短縮できる。そうしたメリットを発注者にアピールし、販売を拡大したい。空港の滑走路や人工島の建設など大型現場からの受注も狙う」

——担い手確保対策は。

「コイルを平らにならす際に圧力を加える作業はコンピュータで自動化しているが、切断・加工作業は職人の手仕事によるところが大きい。このため人材の確保・育成には特に力を入れている。北海道・東北や九州など地方の工業高校を中心に訪問し、採用活動を行っている。加工・切断技術はベテラン社員がいくらでも教えられる。生産ラインの改善策を自ら提案できるような前向きな若手職員が欲

しい」。